

# 令和6年度（2024年度）B級公認審判員の目標



B級審判員より全日本大会への参加資格が与えられる。国内のトップチームの試合を担当するためには、競技規則に従って試合を運営すること、および試合を運営するための基本となる技術を習得することが必須である。

以下にB級審判員が習得すべき事項について記載する。コート上で1人のレフェリーが主導権を握るレフェリーシステムは、ハンドボール競技には適さない。パートナーと常に連携と相互理解を図り、両レフェリーは様々な状況に関する考え方が一致していなければならない。レフェリーの任務も正しく分担されなければならない。

## <試合前>

- 1) トスには指定された時間に両レフェリー、TO が立ち会う。メンバー表、登録証の確認を確実に行う。また、公式記録用紙に正しく記載されているかどうか確認する。
- 2) ユニホームの確認は、必ずTOと協力し行う。色やデザインが判別し難いものは着用させない。レフェリーウェアも判別し難い色は着用しない。相手コートプレイヤーの色とチーム役員の色とが重複しないように呼びかける。また、プレイヤーの装具についても規定にあっているかどうか、TOと協力し、観察しておく。
- 3) ゴールやゴールネット、ボールなどの点検は前もって（選手紹介や選手の確認の前）行い競技開始直前に行わない。
- 4) オフィシャル席の仕事を理解し、シンプルかつ分かりやすく各種の合図をする。試合開始前に必ずオフィシャル席と業務の確認、および機器の操作の確認を行うこと。

## <試合開始時>

- 5) 競技の開始時刻を守る。（早く始めない）早めに選手紹介等が終了したとしても、開始時刻が定刻となるようにTO、両チーム役員に開始までの時間を明確に伝える。

## <試合中>

### ○ 得点の管理, 時間の管理

- 6) 得点の管理は掲示板が正しく表記されているかどうか得点のたびに厳密に行う。着地シート等紛らわしい場合、得点が誤って追加されていないか確認する。  
また、時間の管理(タイムアウト)は1試合を通して同一の基準で、公平かつ平等に競技規則に則って処理する。どちらか一方のレフェリーが公示時計を必ず目視し動作確認をする。

## ○ 走法と位置取り

- 7) コート内のプレーヤーとボールから決して目を離さない。
- 8) 得点合図の後、ゴールの後ろを通過して、決して2人の位置を交代しない。ただし、ノーゴールキーパーの状況を除く。
- 9) バックステップ走法は動きが遅く、非常に危険を伴うため用いない。
- 10) 走りながら、あるいはプレーヤーに背を向けて方向指示やジェスチャーをしない。判定の後その直後の選手、ボールの動きを必ず確認し、次の行動へ移る。
- 11) ゴールレフェリーは、コート内に立たないことを基本とし、展開に応じて前後左右に移動する。
- 12) 7mスローの際、コートレフェリーはスローするプレーヤーの利き腕側に立ち、素早く移動し、シュートの軌道とGKの動きが正しく観察出来る位置をとる。
- 13) CP7名の状況で、GKとCPの交代の妨げにならないような位置取りを。

## ○ 判定の手順、ジェスチャー

- 14) 判定の手順を守る。  
①笛 ②方向指示〔再開方法〕 ③(必要に応じ)ジェスチャー ④ボディーランゲージ
- 15) 正しいジェスチャーを用い、余計なレフェリーのアクションやコミカルな動作は慎む。

## ○ 立ち居振る舞い

- 16) 2人のレフェリーは、同じ種類の笛を使用する。長い時間、笛を口に入れたままにならないよう気を付ける。笛を口に入れたまま、プレーを観察することがないように。
- 17) コート上で腕組み、両手を腰に当てる、ポケットに手を入れる、休めの姿勢など論外。
- 18) 「穏やかに」判定を下し、全力で違反したプレーヤーやポイントへ駆け寄らない。

## ○ 役割分担

- 19) ピボットプレーヤーの観察は、コートレフェリー、ゴールレフェリーで連携する。
- 20) ゴールエリアライン際の判定は、ゴールレフェリーが判定する。
- 21) 領域分担を明確にし、ペアのレフェリーの近くで起こっているプレーに対して、遠い位置から判定をしない。

## ○ 競技規則の正しい運用

- 22) 警告、退場を判定する際は、その理由をボディーランゲージで大きく示す（何度もやらない）。
- 23) 競技規則に則った「判断基準」のもとに判定を下す。「判断基準」のもとに説明ができる。
- 24) 指し違えたときは、必ずタイムアウトを取り2人で協議する。

## <試合終了後>

- 25) 公式記録用紙に正しく記入されているかどうか確認する。